



カンムリウミスズメ、関 希美

わいるとらいふ

Wildlife

No.26

2012年3月15日

NPO法人 宮崎野生動物研究会

Miyazaki Wildlife Research Group

平成 24 年を迎えて

皆様には健やかな新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は、東日本大震災やその影響による原発事故、それに宮崎でも鳥インフルエンザの発生、霧島山系の新燃岳の大噴火、またタイで起きた大洪水など世界的な天災地変に見舞われた一年でした。まさに、苦難の一年だったと言えると思いますが、一方で人間の生き方や社会のあり方に示唆を与えた年であったようにも思えます。

さて、宮崎野生動物研究会も 1971 年に宮崎



の海岸でウミガメの産卵との出会いがあり、それがなんとほとんど盗掘されていることがわかりました。なんとかしなければ

と、調査に取りかかったのが始まりでした。その後 1975 年より本格的に保護活動が行われて、すでに 40 年近くになります。知られなかった野生動物の危機。それに自然の不思議な現象など沢山の資料が蓄積され、保護活動も本格的に進みました。減少していたウミガメの数も年を追うごとに増加の傾向も見られ、活動の効果が現れたように思いましたが、もう一つ戦後の自然開発は知らないうちに拡大し、その影響が現れ海岸の侵食が

進んで来ました。それによって、再びウミガメの上陸産卵数も激減の現象が進み出しました。そこで保護活動をすると同時に、この趣旨に賛同していただく人達に呼びかけ、会員を募りました。幸い現在、正会員 76 名、賛助会員 82 名、多くの人達に賛同を受け保護活動は進んでいます。

どうなる宮崎の海岸

近年、宮崎のウミガメの上陸数は増えていますが産卵地である海岸の環境が悪いのか、産卵数が減少しています。つまりアカウミガメは来ても産卵場所が悪くなっていて、産卵することが出来なくて戻ってしまう個体が増えているのです。海岸侵食は年々激しくなり、昔 100m もあった砂浜も今では 20m ほどとなり、満潮時には砂浜は消えてしまうのです。そこでこれらの環境を守るためには、もっともっと多くの皆さんに参加していただき環境保護をしなければならぬと思います。この趣旨に賛同していただける会員を一人でも多く増やすことだと考えています。



どうぞ皆さんご協力下さい。

竹下 完

屋久島との交流

ウミガメの交流「宮崎から屋久島」

宮崎では、産卵のために上陸してくるアカウミガメが産卵後どこにいるのだろうか、と、1975年から毎年手作りの標識をカメの甲羅に着けて放していました。数年後、そのカメたちが東シナ海で漁をしていた中国の漁師さんに発見されると、次々報告が来ました。広い太平洋を回遊しているものとはばかり思っていた私たちは驚きました。その後も長崎で発見されたり、四国でも発見されたりしましたが、ほとんどは東シナ海で冬を越し翌年再び日本にやってくるというカメの行動が明らかになって来ました。するといろいろな発見もありました。宮崎のカメ調査の後より10年後、屋久島でもウミガメ調査が開始されました。すると宮崎より屋久島の方が沢山のウミガメが、毎年上陸することがわかりました。最近では年間に1万頭を超えることもあるのです。ところが沢山上陸する屋久島とは過去30年間、一度も交流がありませんでした。どうやら同じアカウミガメでも、屋久島に上陸するカメと宮崎に上陸するカメの個体群の中にも地域性があるのではと考えられてい



ました。ところが昨年、屋久島から朗報が届いたのです。宮崎で産卵したカメが屋久島に来て産卵していると。それも2頭でした。2011年5月25日に宮崎の大炊田海岸で産卵した個体と、5月31日に明神山海岸で産卵した個体でした。これは30年間での大発見となりました。宮崎県と屋久島は直線距離で約200kmありますが、19日間と13日間で泳ぎ着いたのです。1日約10kmか15kmのスピードで旅をしていることもわかったのです。今まで宮崎と屋久島の間ではなぜ交流がなかったのか、それは今まで発見されなかっただけなのか今後の調査に大きな期待がかかります。

竹下 完



動物しつもん箱



【質問】昔話などの中でタヌキやキツネが「化ける」という話があるが、本当に化けたりするの？ (延岡市 Nさん)

【答え】残念ながら(?)本当に化けることはありません。ではなぜそう言われるのか?理由の一つとしては、タヌキは驚いた時に倒れて一時

的に気を失い眠ったようになり、この姿がタヌキは人を騙す(化かす)ように見えるためと言われています。またこのことから「狸寝入り」という言葉ができ、英語では「狐寝入り」と表します。日本だけでなく世界共通のイメージなのです。(山本 達哉)

ト ラ

ある日の朝、ベンガルトラの赤ちゃんが生まれたと担当者が報告に来ました。昔から「虎の子」と云われるだけに大変貴重で、動物園での出産例も珍しいのです。このトラも動物園にきて幾度か出産はしたものの、子供を育てたことがないのです。今年こそはと生まれるのを待っていた矢先、3頭の子供が生まれました。床に這うようにうずくまり目はまだ開いていません。ところがどうしたのか、母親はまるで無関心で子供をなめるようなこともしていません。これでは死んでしまう。何とかして子供だけ取り出して人工哺育をするしかないと思いました。でも猛獣だけに、子供を親からはずす事は難しいのです。無理をすると親が子を食べてしまうことがあるからです。じっと親の様子を観察し、親だけを誘導すると、その隙に子供を取り出すことに成功しました。子供は880g、850g、840gでした。200kgもある親から比べるとなんと小さなことか。うまく育つだろうかと少し心配になりました。そこで今度は女性キーパーと共同で世話をすることにしました。子供たちは元気でしたが、1週間目に1頭が死んでしまいました。なんとしても残りの2頭は育てなければと徹夜の育児が続きました。生後5日目までは1日5回の哺乳をしました。そしてミルクを飲ませた後、指でおしりを軽く刺激をすると排泄します。はじめて排尿させた時に熱く伝わってきたのは生きているという証拠の喜びでした。幸い2頭のトラの子は順調に育っていきました。6日目から哺乳量も増え授乳回数も

4回に減らし、生後20日目には足が立つようになりました。哺乳の時間が来ると、うろうろして担当者がミルクを持ってくるのを待つようになりました。35日目では口の中に指を入れると歯でかむようになりました。そこで離乳を始めることにしました。肉をミンチにし、少しずつミルクを混ぜて口に入れると、すぐに吐き出してしまいました。でも根気よく続けると、のどを通るようになりました。その頃になると、トラの子は遊び盛りで、餌も忘れて走り回ったりします、だんだんとミルクの量を減らし、肉を増やし、完全に離乳したのは生後72日目でした。ある日、散歩のために園内を歩いていると、急に走り出し池に飛び込んでしまったのです。慌てて駆けつけると2頭のトラは平気で泳いでいました。100日も過ぎると体重は12kgにもなり、時々気に入らないと「ウエー」と歯をむき出してきます、もう抱くようなことは出来なくなりました。立派な猛獣になったのです。その成長を見てほっとしました。



竹下 完

『アサギマダラ』



ふわりふわりと空中を漂うように舞うこの蝶を一度は見られた事があると思いますが、それは夢の中の花園をかけ回っているようで何か心が癒されます。

形は蝶の中でも大型で前翅の地色は黒色、後翅は茶褐色の半透明な浅黄色で大型の斑紋が目立ち、鱗粉が退化してつやがあります。まだまだ詳しい生態は解明されていないようですが、北は北海道から南は沖縄、八重山諸島にまで見る事ができ、また平地から高山に分布、不思議なことに春は北上、夏は南下を繰り返すこの長距離の渡りをする事が知られています。

宮崎県でも各地で発見されていますが、最近平和台のはにわ園に植栽されたフジバカマが咲く頃になると、毎年沢山のアサギマダラがやってきてその優美な姿を見る事が出来ます。日本中でこの長距離移動の謎を解くために羽にマーキングされ調査が活発に行われていて、宮崎でも発見されたことがあり、ここでも毎年マーキングして放しています。

中には福島県から種子島まで直線で約 2000 キロを移動したことも知られ、謎の旅をする蝶なのです。

竹下 完

子ガメの孵化の観察会に参加して

賛助会員 森崎 理恵

今年の夏は宮崎野生動物研究会の調査員小豆野さんとの出会いがあり、親子で子ガメの孵化の観察会に沢山参加させてもらいとても良い体験が出来て感謝の気持ちでいっぱいです。本当に有り難うございました。夏休みでもあり子供も早起きして子ガメに会えるのを毎回とても楽しみにしていました。子ガメたちが、いっせいに海に向かって進む姿はとても可愛らしく愛らしかったです。これから長い旅に出かけると聞いて親ガメにあうこともない子ガメって強いなあと思いました。小豆野さんのおかげでアカウミガメのことを沢山知り、ますますカメのことが大好きになりました。また、子ガメが海に旅立っていった後、水平線から朝日が昇ってくる自然の美しさも、すてきな光景でとても感動しました。昔の海岸とくらべどんどん侵食が進み砂浜の減少など環境問題がとても心配ですが私たちに出来ることは何かを考えこれからも保護活動に協力し大切に守っていきたいと思います。



フラミンゴが飛んだ

動物園で、フラミンゴの飛ぶ姿を観ていただくことに挑戦して成功しました。40年前から行っているフラミンゴショーに飛翔を組み入れました。再開第1回目、900名が見守る中フラミンゴは30mの池をウォーという歓声の中、確かに飛翔しました。ただ、完全に飛んだのは40羽程挑戦した中の5～6羽。まだ、風切り羽が生えそろっていないのです。それでも、池を飛び越すには十分です。フラミンゴの飛ぶ姿は美しい。首と足を伸ばし鮮やかなピンク色です。優雅に飛ぶもの、少ない羽を一生懸命に羽ばたかせ飛び上がっているもの、そして、池の中を歩くものと様々です。その中に面白いものがあります。体は浮き上がっているのに足を空中で前後に動かして、まるで水面を走っている様なものがあるのです。普通では観察できない行動です。飛び方を習得していないのでしょう。フラミンゴを保定した時、片手で両羽を持ち上げ反対の手で首を前に真直ぐ伸ばすと反射的に足は後方に真直ぐ上げて伸ばすことが多いので、もう少し浮き上がれば自然にこの飛行スタイルになるはずです。日増しに飛ぶ個体が増えていきます。このような興味深い姿が観られるのは、今のうちだけかもしれません。

出口 智久



宮崎の 自然と 神話



尾前 明洋

今年は古事記編纂 1300年ということで、ここ宮崎県も神話にちなんだ様々な催しが行われています。私は宮崎に生まれ、宮崎で育ってきましたが、神話についてはただいま勉強中というところです。

先日、県外の友人と江田神社、青島神社に行きました。天地創造や海幸彦と山幸彦の話などとても興味深いものでした。道中、雄大に広がる日向灘の景色に友人は深く感動していました。県北部のリアス式海岸、南部の鬼の洗濯岩、そして県中央部には南北に伸びる砂浜が広がり、その砂浜がアカウミガメの産卵地であることを説明すると、初めは冗談だろうと疑っていました。友人にとってウミガメは図鑑や水族館の中だけの存在だったようです。

宮崎には貴重な自然がたくさん残されています。これは意外にも宮崎の人にも知られていないかもしれません。私が神話についてあまり詳しくなかったように、関心のない人にはきれいな景色も貴重な生き物も目に入らないのかもしれません。

遙か昔に山幸彦も同じ海を見ていたのかなと思いを馳せながら、県外の友人が宮崎の自然に興味を持ってくれたのは何よりでした。

次は、浜脇 幸一さんをお願いします。

野生研のあしあと

12/14 研修所の草刈り (竹下・長谷)

12/17 ・わいるどらいふ 25 号発行

・九州環境パートナーシップオフィス主催

「EPO九州：環境教育トーク in 綾」が綾町ふれあい合宿センター会議室で開催 (竹下参加)

12/20 野生研 12 月例会 研修所 参加 11 名

- ① 事務局連絡
- ② 沖永良部ウミガメ会議の報告(竹下・山本)

12/23～25 カモシカ調査

平成 24 年

1/20 講演 宮崎潮見小学校 4 年生 120 名(竹下)

「宮崎の環境学習 野生動物とウミガメの生態」

1/24 野生研 1 月例会 研修所 参加 12 名

- ① 屋久島の上陸状況
- ② 会員数 正会員 76 名、賛助会員 82 名
- ③ 会員募集 今年は会員強化する
- ④ 24 年度ウミガメ 調査目標
- ⑤ 宮崎野生動物研究会研究発表会開催の予定
- ⑥ ウミガメの天敵と対策など討議：キツネ、野犬、シロアリ、カモメ、ハビ、スナガニ、草の根被害状況と対策
- ⑦ 日本ウミガメ協議会ウミガメ会議は鹿児島県志布志市で開催予定
- ⑧ 「わいるどらいふ 26 号」編集会議

2/7 宮崎市文化財課 23 年度ウミガメ調査報告書提出

2/21 2 月野生研月例会 研修所 参加 14 名

- ① 会長挨拶
- ② わいるどらいふ 26 号編集経過報告
- ③ 2006.12 月より使用させていただいた研修所ですが都合により今月をもって終了となりました。長い間有り難うございました。

動物記録

平成 24 年

1/1 串間沖で、オニヒトデ大量発生。サンゴ群落が被害に遭う。【宮崎日日新聞】

1/9 高鍋・旧 NTT 鉄塔で、ハヤブサの「シン君」16 回目の越冬。地域住民は温かく見守る。【宮崎日日新聞】

1/13 ガラパゴス諸島で国際チームが、交雑種の DNA 分析でゾウガメ絶滅種再発見。この手法での再発見は世界初。【夕刊デイリー】

2/2 マングースが北上。薩摩川内で確認。本土 2 ヲ所目。【西日本新聞】

2/3 霧島ジオパーク、世界認定に向けて、来年 4 月にも推薦申請。【南日本新聞】

2/8 1990 年代初頭に、米ハワイ近くのミッドウェイ諸島で確認されたのを最後に絶滅したと考えられていたミズナギドリ的一种が、小笠原諸島で生息しているのが発見された。【宮崎日日新聞】

2/10 延岡市島野浦保全会が、船舶等に対し、サンゴ群生域周知のためブイを設置。【宮崎日日新聞】

2/14 南シナ海では、外国密猟者によるアオウミガメの乱獲が絶えない。【朝日新聞】

2/16 ユネスコなどの調査報告によると、海の環境破壊は深刻。乱獲や富栄養化が進んでいる。【宮崎日日新聞】

新会員のご紹介 (敬称略)

賛助会員：遠藤 晃・荒武 たえ子・小畑 典子



宮崎野生動物研究会通信「わいるどらいふ」 No.26 2012年3月15日発行

特定非営利活動法人

宮崎野生動物研究会 (Miyazaki Wildlife Research Group)

代表 竹下 完

880-0825 宮崎市東大宮 3 丁目 9-11

Tel 0985-25-7585 Fax 0985-25-7585

Email : kan-take@miyazaki-catv.ne.jp http://www.m-yaseiken.org



「わいるどらいふ」の無断引用、転載、複製を禁止します。

ウ メ